

# 外交史学から國際政治史学へ

——國際政治学と國際政治史学の開拓・樹立について——

神 川 彦 松

## 一 はしがき

第一次大戦の頃までは、普通に「外交史」*Histoire Diplomatique, Diplomatic History* とよばれていた一科の歴史科学は、その後、次第に「國際政治史」*International Political History or International History, Histoire Politique Internationale ou Histoire Internationale* とよばれるようになった。今日でも、なおこの両様のよび方が並び行われてはいるが、何れかといえば、國際政治史という名称の方が、より多く行われている。これを学問方法論の上からみると、この方が、外交史というよりも、ヨリ正確であるというべきである。わが国において、「國際政治史」というよび方することにおいて先鞭をつけた者の一人は私であるといって過言ではないと思う。わたしは何故に、従来「外交史」——正確には「外交史学」——というよび方の代りに「國際政治史」——正確には「國際政治史学」——とよぶようになったかという、これには学史上の理由と学問方法論上の理由とがあるのである。本論文においては、自分がこういう試みをするにいたった経過と理由とを簡短にのべてみたい。またこのことは同時に自分が自ら計らず何

故、「国際政治学」という新しい学問の開拓と樹立を志すようになったか、およびなぜ「外交史」を「国際政治史」に編成替えを試みるようになったかを物語るものである。

## 二 フランスの外交史学界

私は東大法学部在学中立作太郎先生から外交史を教えられ、大正四年春、卒業と同時に先生の推輓によって、大学で官費で外交史を専攻することになり、そして大正七年十一月、第一次大戦の休戦と同時にパリに留学することになったのである。そもそもわが国における外交史学の先輩は、有賀長雄、立作太郎、林毅陸の三博士であったが、これらの先輩も、みなフランスに留学し、フランスの外交史学の影響を多くうけられた方々であった。これはひとりわが国だけのことでなく、当時世界どこでも、大体において外交史学といえ、それはフランスの学問と思われるおり、パリはこの学問の本山たるの観があつたのである。

このフランスでも、外交史学が勃興したのは十九世紀の九十年代であるが、当時、何故にパリで外交史学が盛んになったかとその由来をたずねると、当時ヨーロッパ大陸では、なおパリが世界から留学生の集まる中心であり、とくに国際法、外交史、国際事情など国際的活動を志す学生たちの集まる場所であつた。そしてこういう比較的新らしい諸学科はパリ大学のような古い大学では講座がないので、多く、*École libre des Sciences Politiques* という有名な私立大学で行われていた。この大学は普仏戦後の一八七四年に、官吏を養成する目的で創立されたものであるが、フランスの青年も、外交官領事官を志す者はみな、パリ大学に学ぶと同時にこの大学の外交学部の講義を聴くを例と

したのである。私ももとより、パリ大学法学部で国際法や、歴史の講義を聴くと同時に、この大学的外交学部で、外交史、国際事情、植民政策、植民史などの講義を聴いたのである。

フランスには当時、外交史学界に三人の有名な学者がいた。フランスの外交史学が興ったのも主としてこの三人の力に負うところ大であるといつて誤りではない。この三人とは Antonin Delboul, Emile Bourgeois, Charles Dupuis である。ドゥビドゥールはもとナンシイ大学の史学教授であつたが、後パリ大学文学部教授となり、文学部長にもなつたが、生涯、外交史の研究に没頭した人である。その主著は *Histoire diplomatique de l'Europe* 前後四巻から成る大著であるが、一八一五年のウィーン会議から一八七八年ベルリン会議までの二巻は一八九一年に公刊された。一八七八年ベルリン会議後から一九一六年、第一次大戦の前半までの二巻はその死去の前年の一九一六年に公刊されたのである。この著は久しく世界的の權威として推重されたもので、わが国には特に大きな影響を与えたものである。この著の前二巻は、ちょうど日清戦争の直前にわが国に輸入され、外相西園寺公望の要望でフランス語の達人酒井雄三郎によつて翻訳された。これはたしかに名訳であり、わが国の外交史学の發達に寄与するところ大であつた。ただこの翻訳は原著のテキストの部分のみを訳し、脚註に載せられた資料文献を一切省略したので、学問的に使用するには欠陥があるを免がれなかつた。第一次大戦中に出版された後の二巻も、早大、西洋史の教授煙山專太郎によつて訳されたが、やはり、一切註や文献の類を省略した欠点があつた。

ヅビドゥールと並び称せられたエミール・ブルジョア教授の主著は *Manuel historique de politique Étrangère* 四巻である。Les Origines (1610-1789) と副題された第一巻と、Les Révolutions (1789-1830) と副題された第二巻

とはゾウビヅールの著より一年おかれて一八九二年に世に現われた。第三巻 *Le temps present* (1830-1878) はアルジェシラス会議の開かれた一九〇六年に出版され、第四巻 *La politique mondiale* (1878-1919) は第一次大戦後の一九二五年に刊行されたのであった。右のゾウビヅールの最初の二巻と、ブルジョアの第一巻とが一八九〇年代の初めに殆ど時を同じうして世に出て、フランスの外交史学を世界に重からしめたのである。この両氏の著が世界の外交史学界に与えた影響は大なるものがあつた。

永くパリ私立政治学校で教鞭をとり、後にフランス学界の長老となつたシャルル・デュブュイは *Le principe d'équilibre et le concert européen de la paix de Westphalie à l'acte d'Algeiras*, の名著を一九〇九年に世に問うて、フランス外交史学に新生面を拓いたのである。

元来「外交史」という名称は、ゾウビヅールが始めて使い出したことは右の第一巻の序文に示されているとおりである。この著者は外交史の対象として「欧州の均勢」*l'équilibre européen* なるものを取りあげている。それは何かというと「ウラル山から大西洋にいたり、北極洋から地中海にいたるまで、諸国が現存諸条約を尊重し、設定された領土の境界線を侵さず、確認された政治的権利を害しないように精神的および物質的重量をあんばいすること」であると著者は定義している。そしてかれの著書の最初の二巻は一八一四年のウィнна会議から一八七八年のベルリン会議にいたる間に欧州諸国間に起つた諸事件で、この「欧州の均勢」の樹立、固定、または変動に大小の影響を与えたものを叙述することを目的とし、然らざるものは省略するという方針とすることを序文でこわっているのである。

右によつてわかるように、ドゥビドゥールが外交史の対象として指定したものは、単なる「外交」ではなく「欧州の均勢」である。そもそも勢力均衡というものは古今を通ずる国際政治の根本的な鉄則であり、その最も重要な原則ないし政策・行動なのである。とくに近代前期、イタリア戦争からナポレオン戦争にいたる三世紀の間では顕著に現れたものである。それでこの時期を外交史家は普通に「勢力均衡の時期」とよぶことになるのである。ところがツウビツウールはウィнна会議からベルリン会議にいたる時期をも「勢力均衡」の時期に含めて叙述している。もとより「均勢」は近代を通ずる事象ないし鉄則であるから、これをもつてあえて誤りということとはできないが、この時期は、もはや「均勢の時期」とはよばないで史家は「欧州協調」の時期 *Europäer Concert, Concert Européen, Europäisches Konzert* とよぶことが普通となるのである。歴史的事実的意義で「欧州協調」というのは欧州における諸強国の共同利害の観念に基き、欧州における、すべての、もしくは多数の強国が、主として欧州国際事件を、なるべく、互譲妥協的精神で処理するため、ときどき会議を開催し、なるべく共同一致の政策ないし行動をとり、もしくはとらうとする制度を指すのである。〔拙著「近代国際政治」中巻、六頁参照〕 この欧州協調という制度は、その起源では二つの異なった形態をもつて発現したのである。その一は、欧州協調のいわば実証的・物理的・実力的基礎を成すところの「欧州執政制」 *European Directory, Directoire Européen, Europäisches Directorium* であり、その二は、その制度の宗教的・精神的・神秘的基礎を成すところの「神聖同盟」 *Holy Alliance, Sainte-Alliance, Heilige Allianz* である。〔同上〕 ところが、ツウビツウールは、欧州協調の制度をよく把握しなかったために、欧州協調と、神聖同盟または欧州執政制とを混同する誤りに陥っているのである。この区別をはっきり認識したのはデュブユイの著に始ま

るのである。この著以来、外交史家は、近代前期を「欧州均勢の時期」とし、後期を「欧州協調の時期」とよぶようになるのである。右によってわかるようにヅッビドゥールがいわゆる外交史の対象として選んだものは、普通にいうところの「外交」ではなくて、実は国際政治の重要な一部分である「勢力均衡」であったのである。

上と挙げたエミール・ブルジョアの著書の題名によってわかるように、この著者は「外交史」という名称を使わず *Histoire de politique étrangère* すなわち「対外政策の歴史」という名称を用いているのである。「対外政策」 *Foreign Policy*, *Aussenpolitik* というのは通例、一国の外国に対する政治外交上の政策をさすのである。このことは、数箇国の国際的団体または国際団体全体の共同の対外政策をさすのには用いられない。ブルジョアの著書は、主としてフランスを中心とし、フランスの立場からヨーロッパの外交を取扱っているから、この名称はかれの立場には妥当なのである。このことは、イギリスやドイツでも使用されるが「外交史」のかわりに使われることは多くないのである。

デュプュイにいたっては「外交史」という名称も「対外政策史」という名称も使用しないことはかれの右の著書の題名によってもしられるのである。

### 三 国際政治史の元祖、ドイツおよびスイス国際政治史学界

右にのべたように普通に、外交史という学問はフランス的起源をもつものであるように思われているが、実はこれは誤りである。ヨーロッパの史学界で外交史的研究の元祖とみられるものは、フランスのヅッビドゥールではなく、

近代初期のイタリアの史家であり、政治家であるフランチェスコ・グイッチャルディーニ Francesco Guicciardini (1483-1540) であることは夙にチューリヒ大学教授エッツァルト・フューター Eduard Fueter, *Geschichte der neuen Historiographie* (1911) によって指摘されたところである。グイッチャルディーニは *Istoria d' Italia*. 1492-1534, 20 vols の大著でイタリア戦争時代の国際政治史を書いているのである。これはルネッサンス時代におけるイタリア史学の傑作である。この書は、イタリア諸国間の相互闘争と相互依存、国内政治と国際政治との関連、軍事行動と政治行動との相互関係など国際政治の諸特徴を明瞭に叙述している。かれはマキアヴェリの影響をうけたが、マキアヴェリとともに、史学を文学から独立せしめるという大なる功績を残したのである。かれは若い時すでに、*Istoria di Firenze* (1378-1509) を書いて、史的才能を示したのであるが、これらの史書でかれは史実の客観的描写、人物、動機、事件の明快な分析、叙述の簡潔直裁などの点で前人未発の特色を発揮したのである。

「国際政治史の元祖」とよばれるべきは右のようにイタリアのグイッチャルディーニであるが、しかし、真に近代国際政治史の建設者というべきは「近代史学の祖」といわれるドイツのレオポールト・フォン・ランケ Leopold von Ranke (1795-1886) その人である。ランケの初期の大著であり、忽ちヨーロッパ的名声を博したものは *Die römischen Päpste im 16. und 17. Jahrhundert*, 3 Bde. (1834-1839). であるが、この書の執筆中に著書は嘆じて曰った「普遍史以外には歴史というものは書けないものだ。自分は発展の高遠性と論理性によって、いふなれば神のやり方によって有頂天にさせられる」と。かれは後期の大著 *Französische Geschichte im 16. und 17. Jahrhundert* 5 Bde. (1852-1861) の序文のうちで、こうのべている「偉大な国家や人民というものは、二重の性格をもっていた。一つは国民的

性格であり、他は世界の運命に属する性格だ。フランスの普遍的側面はとくに顕著であった、けだしもろもの政治的激動はたびたびその国から起ったから」と。歴史上の偉大な国家はみな国際的に大なる影響を及ぼした。国際的に大なる影響力をもたないような国家は世界史的国家または民族ではないのである。偉大な国家ないし民族の歴史は国際観点から観察しなければその真相を明らかにすることはできない。ランケはこのことを学的生涯の初期から深く認識していたのである。ランケの最後より二番目の大著である *Englische Geschichte im 16. und 17. Jahrhundert*, 7 Bde, (1859-68) は、その性格はイギリスの国際政治史とみるべきもので、その主たる価値はイギリスの大陸に対する関係、並にその諸関係の内政に対する反響をとくに明かにした点にあるとみられているのである。(G.P. Gooch, *History and Historians in the 19th Century*, 2 ed. 1952, P. 89 参照)

ランケの出世作で一八二四年に世に問われた *Geschichte der romanischen und germanischen Völker von 1494-1514*. Beilage : zur Kritik neuer Geschichtsschreiber. は、*Guicciardini, Istoria d'Italia* と同じく、イタリア戦争の初期を取扱ったものであるが、これはたしかに近代国際政治史の学的著作であるといふことである。その後かれは *Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation*, 6 Bde. (1839-1847) ; *Neun Bücher preussischer Geschichte*, 3 Bde. (1847-1848) ; *Zwölf Bücher preussischen Geschichte*, 5 Bde. 1874. 宗教革命時代のドイツおよび欧州諸国の国際関係を叙述し、または名論文 *Die Grossen Mächte* (Historisch-politische Zeitschrift, 2te Bd. 1833) で十七世紀後半から十九世紀初期にいたる欧州国際政治の歴史を簡潔に叙述したのである。これらの諸著によって、われらは大体において近世初期から十九世紀初めにいたるまでの国際政治の歴史を学ぶ



とができるのである。これらの諸著は、かれの史学の根本的態度に基き、すべて普遍史的立場から取扱われているもので、この意味で国際政治史の性格をもつものである。かれはその出世作の附録 *Zur Kritik neuer Geschichtsschreiber* で、かれの史学方法論を概論し、従前の哲学的または文学的歴史の書き方を排斥し、客観的・実証的・文献的歴史方法を主張して「近代史学の祖」と仰がれるようになったのであるが、かれは同時に、近代史学としての「国際政治史学の祖」であるといって過言ではないと思われる。

ランケの学風を継いで更にこれを発展せしめ、本格的に「国際政治史学」といわれるべき著作を世に出した者はスミス、チューリヒ大学の史学教授エドアルト・フューター *Eduard Fueter* であると思われる。かれが *Handbuch der Mittelalterlichen und Neuere Geschichte, herausgegeben von G. V. Below und F. Meinecke* の一卷として書いた *Geschichte des europäischen Staatensystems von 1492-1659* (1919) は画期的な名著である。この著において始めていわゆる外交史なるものは、欧州国際政治 *Europäische Internationale Politik* と欧州国際体制 *Europäisches Staatensystem* の変遷を取扱うものであるとされたのである。この著は十六世紀の前半における欧州国際体制の変動に与って力のあった諸事件を叙述するものである。かれは「国際政治」*Internationale Politik* を概念して、政治的（外交的）、軍事的または経済・金融的手段をもってする諸国家とくに諸強国間の闘争関係であるとしている。「欧州国際体制」というのは、欧州諸強国間の交渉および闘争関係から生成した国際体制のことであるとしている。この書は驚くべく豊富な資料と文献とを渉猟してイタリア戦争時代における欧州国際政治および国際体制の変動を叙述したすぐれた科学的著作である。右の叢書のうちには、フューターの取扱った時代に続く *M. Immich, Geschichte der*

Europäischen Staatensystem von 1660-1789 (1905), A. Wahl, Geschichte des Europäischen Staatensystems von 1789-1815, (1912) が刊行されているが、この両者とも、その学価値は遙かにフューターの著に及ばない憾みがあるのである。

#### 四 アメリカの外交史学界

フランス、ドイツ以外で外交史学に貢献したものを求めると、第一は米国の David J. Hill を挙げねばならない。かれの大著 A History of Diplomacy in the International Development of Europe, vol. I. The Struggle for the Universal Empire, (1905) ; vol. II, The Establishment of Territorial Sovereignty, 1906 ; vol. III, The Diplomacy of the Age of Absolutism, (1914), は、紀元前三〇年ローマ帝国の創建の時より筆をおこし、フランス革命勃発前一四年、ポーランドの第二分割にいたるまでの歴史を取扱っている。従前における欧州外交史の著作は近世紀の初頭イタリヤ戦争の時から筆を起すか、また普通には、最初の「欧州憲法」とよばれるウエストフアリア条約を生んだ一六四八年のウエストフアリア会議から稿を起すを例としたのである。しかるにヒルのこの著は、その出発点を遠く古代にさかのぼらしめ、古代中世を通じて、近代第一期の終り近くまで通叙したという点で特色をもつのである。今日でも古代から近世にいたるまでの通史的外交史の著作はこのヒルの著を除いては殆どなき有様である。

## 五 従前の外交史、國際政治史に対して筆者の抱いた疑問と批判

上にのべたところによって、従前に、外交史とよばれた一科の史学は十九世紀の末葉にフランスに興った学問として知られたが、実際には、夙にイタリヤやドイツやスイスで實質的に國際政治史として發達してきたことがわかった。そしてこの学問には、一般に認められた名称がなく、いろいろの名称でよばれていたことがわかったのである。さらに、この学問の發達に寄与した各国の主たる著作は、大体において第一次大戦以前に出ていたのである。筆者のわたしが外交史の専攻に着手した当時の世界の外交史学の現状は、ざっとこのようなものであったのである。

わたしがこの方面の研究を進めるに従つて次第に抱くようになった疑問はこうであつた。普通に一つの社会科学とそれに対応する歴史科学とは同じ名称をもつてよばれている。たとえば、政治学と政治史、経済学と經濟史、法律学と法律史のごとくである。とくにそれぞれの国内法学とそれに対応するそれぞれの国内法史、國際法学とそれに対応する國際法史の存在している事實は、自分に疑問を抱かせたのである。なぜ政治学の分野では、国家政治学に対応して、国家政治史が存在しているのに外交史に対しては外交学というものが無いのであろうかと。この場合にも、法学の場合のように、国内法学に対しては国内法史があり、國際法学に対しては國際法史があるように、また国家政治学に対して、国家政治史があるように、國際政治学というものに対して國際政治史というものがなければならぬのではないかと想到したのであつた。わたしが、國際政治学と國際政治史の開拓と樹立という仕事を自らに課するようになったのは、実にこの疑問を解決するためであつたのである。

ところが、第一次世界大戦を動機として、世界の学問界にも革新の気がみなぎり出し、あらゆる社会科学も更生せねばならぬと実感されるようになった。これまでのあらゆる学問はもはや時勢おくれであり、新しい学問が打建てられねばならないと感ぜられるようになったのである。この時にあたり、わが国ではドイツ西南学派の新科学方法論が輸入されて非常に流行をみるようになったのである。この学界の潮流にさおさして、わたしも、わたしなりに、この新カント派的の科学方法論を大体のよりどころとして、国際政治学の開拓と国際政治史の樹立という仕事に熱心に従事したのである。わたしの解するところによると、歴史的・経験的な文化事象の一つである政治事象にも、他の文化科学と同様に理論科学たる政治学と歴史科学たる政治史とが並存しなければならない。この一对の科学は、その対象 *Gegenstand* は同一であり、ただ方法 *Methode* を異するにすぎないところの姉妹科学である。その対象はともに歴史的・経験的な政治現象である。これを理論科学的方法で取扱えば、政治学となり、歴史科学的方法で取扱えば、政治史となるにすぎない。この二つの学科の關係はしたがって密接不可分、相互補助の間柄である。その対象が、ともに歴史的・経験的事象であるから、その学的本質はともに歴史的・経験的である。その研究方法は根本的には歴史科学の方法であるべきだと考えたのである。そして最近の学問の傾向に順応して、政治学は、政治史の与える資料文献を参考せねばならないと同様に、政治史は政治学の教える理論や法則を参考とせねばならないと考えたのである。

このような科学方法論的な省察は、従来の外交史ではほとんど全く試みられていなかったのは当然である。また国際政治学という一科の学問がまだ存在していなかったのだから、国際政治史という名称も用いられなかったのは当然

であるわけだ。國際政治史が生れ出るためには、國際政治学の存在が要請せられるし、國際政治学が成立するためには國際政治史の存在と發達とが要請されることが筆者にわかつてきたのである。この二つの學問は相關關係にあり、互に他を必要とし、互に他に依存するものであることを認識するようになったのである。この両者の先後の關係、すなわち、國際政治学が先きか、國際政治史が先きかの問題は、ちょうど、鶏と卵との先後論と同じようなものである。鶏は卵から生れるから卵が先きともいえるし、その卵は鶏から生れるから鶏が先きだともいえるのである。國際政治学と國際政治史との關係も、何れを先きとし、何れを後とすることはできず、ただ密接不離、相互補助の關係にあると認められれば足るであらう。この兩者の關係を形容して、理論科学の歴史化、歴史科学の理論化とよばれることは人の知るとおりである。わたしが國際政治学の体系を建てようと努力した際に大に役立ったのは、右のような方法論的な省察と同時に、実はフィヒテの *Der geschlossene Handelsstaat*. 1800 の構造であつた。この書では明らかに、歴史的・理論的部分と政策論的部分とが並立されているのをみたのである。

## 六 國際政治学と國際政治史の開拓

このようにして、自分は一方で國際政治学の開拓と樹立という困難な仕事に邁進すると同時に、外交史の國際政治史への編成換えという仕事に精進したのである。ところが國際政治学を開拓するのには、その準備として近代世界外交史全体を研究せねばならない。単に一時期・一時代、一国・一地域の外交史を研究するのでは目的に副わない。また國際政治史の開拓にも、近代世界外交史の全体を研究せねばならないのである。しかし近代的史学研究は、何とし

ても客觀的・實証的・文献的方法に拠らねばないから、こういう広範な事業は、到底、一人のよくなしうるところではない。古今に卓越する大史家といわれるあのランケのごときですら、「古代史については批判家 Kritiker であり、中世史については教師 Lehrer であり、近代史については考証家 Untersucher である」とかれの高弟 Alfred Dove によつて評されている有様である。しかも近代史についてもランケが真に根本史料による考証的研究を遂げたのは、主として十七、十七・八世紀の欧州史に限られていることは人の知るところである。こういう次第であるから、近代の世界國際政治史の全体にわたつて根本史料による史的研究をするなどということは何人もよくするところではないのである。それどころではない。上にも述べたように、近代世界外交史に関しては、まだ一つもまとまつた通史だにないという有様なのである。さきに挙げた外では、ソ連の国立社会經濟研究所から「外交史」二卷（一九四一年）が出てゐるが、これはウェー・パー・ポチョムキン監修の下に、八名の歴史家が分担執筆したもので、ただ簡短な單なる世界外交通史にすぎない。その学的価値も大したものではないことは一般の評である。イギリスの外交史家 R. B. Mowat の History of European Diplomacy 二卷は、それにかれの「ナポレオン時代史」を補足すると、近代を通ずる欧州外交史（一九二四年まで）を構成する。また同じ著者の A. History of Europe and the Modern World 1492-1915, (1927) はただ一冊の近代欧州通史にすぎない。この著者の著作はもとより、根本史料によるものではなく、その学的価値の小なるものであることは学界の通評である。

右のような有様であるので、とにかく、まず近代世界國際政治史の通史的研究を試みるのが、自分の一つの学問的課題となつたのである。自分は、独、仏、英、米諸国で蒐集した文献や資料を経とし、自分が試みに建てた國際政

治学の理論を緯として、曲りなりに「近代国際政治史」三巻四冊を書いてみたのである。(この著作は意外にも日本学士院賞(昭和二十七年)を受ける栄えをえた。)

## 七 国際政治学と国際政治史との関係

しからばついで、国際政治史の執筆にあたって、国際政治学のどういう部分が、主として補助となったかというに、それは筆者のいわゆる「国際政治科学」の部門である。筆者の「国際政治学概論」の示すように、筆者は、広義の「国際政治学」を分つて(1)「国際政治科学」International Political Science (2)「国際政治政策学」International Political Policy Science および(3)「国際政治弁証法論」Dialectics of International Politics の三部門とするのであるが、国際政治史の著述にあたって直接まず補助手段となるのは、国際政治対象の理論ないし法則科学たるところの国際政治科学であることは当然である。国際政治科学と国際政治史とは同一の対象をもつ文化科学であつて、前者は、いわゆる普遍的取扱 Generalisierendes Verfahren を施すものであるに對して、後者は、個別化的取扱 Individualisierendes Verfahren をなすという差異があるにすぎないからだ。いうまでもなく、この論文で「国際政治科学」というのは、当然「近代国際政治科学」を意味するもので、「古代国際政治科学」または「中世国際政治科学」は含まれないのである。この近代国際政治学の提供するところの知識、理論ないし法則を参考として、近代国際政治史の結構を形成するのである。近代国際政治学の教ゆる国際政治概念、近代民族学説、近代民族主義学説、近代帝国主義学説、ないし近代国際主義学説などを参考として、近代国際政治史の編・章別を構想するのである。近代国際政治の時期全体は、大観すると、「近代民族主義の歴史」であるというのが、史家の通説である。しかしこの全時

期は、また見方によつては「近代帝國主義の歴史」であるともいうことができ、また「近代國際主義の歴史」であるといつてもあながち誤りではないのである。人も知るようにイギリスの歴史家、政治学者である Ramsay Muir はその名著 *Nationalism and Internationalism* で、近代欧州史を、民族主義と國際主義の観点から大観して、その發展を明快に解説したのである。わたしは、近代國際政治史を書くにあたって、欧米の類書を参照して、第一期、近代前期（1494-1815）を「勢力均衡の時期」と称し、第二期、近代中期（1815-1871）を「欧州協調の時期」と名づけ、第三期、近代後期（1871-1919）を「最近帝國主義の時期」とよぶこととしたことは、拙著「近代國際政治史」の示すとおりである。拙著「國際政治学概論」第二篇國際政治科学の部門と「近代國際政治史」との間に、学問的にどんなに密接な関連があるかは、この両著を併読される者が実感するところであらうと信ずるのである。

拙著「國際政治学概論」の國際政治弁証法論の部門と、近代國際政治史との関係は、右の場合のように、直接かつ密接なものではないのである。わたしの國際政治科学は方法的にはいわば國際政治現象の靜的考察であるのに対して、國際政治弁証論はその動的考察たろうと期するものである。社会科学はコントがつとに主張したように、社会現象の靜態的觀察とともに動態的觀察をもつてするのでなければ、その真相を究明することはできないと思われる。また Joseph Schumpeter がその名著 *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*. 1908 や *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 1912 など、資本主義經濟の靜態的考察を行っていることは人の知るところである。社会科学は普通、靜態的觀察に偏して、とかく動態的觀察をゆるがせにする傾きあるを免れないこと人の知るところである。科学的に動態的觀察をすることはたしかにきわめて困難な業ではあるが、わたしは敢



て、国際政治弁証法論でこれを試みようとするのである。国際政治の進化、発展の理法を探求して、歴史的・経験的国際政治から、理念的・超越的国際政治へと進歩発展してゆく経路、方針を案出しようと試みるのである。このうち歴史的・経験的国際政治の進化の理法の探求は、国際政治史に負うところ大なると同時に、またそれは反対に、国際政治史の研究に大なる光を与えるものであらざるを得ない。この点においても、国際政治史と国際政治学との間に相互補助の関連があることは理の看易きところであるといわねばならない。

国際政治史と最も関連のうすいのは、いうまでもなく「国際政治学」の「国際政治政策学」の部門である。筆者のいうところの「国際政治政策学」とは「あるべき国際政治」*Sein-sollende internationale Politik* すなわち「理念的な国際政治」*Idealtypus der internationalen Politik* を実現するための手段方法を探究するところの実践科学 *Praktische Wissenschaft* のことである。この部門の対象とするところのものは、「あつた、もしくはあるところの国際政治」ではなくて、将来実現さるべき「あるべき国際政治」であるから、歴史的・経験的国際政治事象を対象とするところの国際政治史と直接関連のないことは当然であらねばならない。

科学方法論上、右のような方法で結構された筆者の「近代国際政治史」なるものは、したがって、近代国際団体 *Moderne Völkergemeinschaft* における諸国家の権力闘争とその間の支配服従の関係の発展過程を叙述するところの歴史科学 *Geschichtswissenschaft* に外ならない。十五・六世紀のころおいはじまった近代国際政治は、ほぼ四百五十年の変遷を経て、第二次大戦の終局にいたり、一応、段落に到達したとみることが出来る。この四世紀半にわたる世界国際政治の発展を一つの統一ある大きな歴史時代として大観しようとするのが近代国際政治史の目的である。

最近の一世紀とか、二世紀とかに時期を限定せず、またヨーロッパとかアメリカとか、アジアとかに地域を限局することなく、広い視野に立って、近代国際政治全体を一望の下に眺めわたり、その全貌を捉えようとするのが、この史学の狙いとするところである。（拙著「近代国際政治史」、拙論「大観国際政治史」参照。）

## 八 国際政治学における国際政治概念と

### 国際政治史における国際政治ということば

まず近代国際政治史を書くに当たってぶつかる問題は、一たい「国際政治」とはたして何かという問題である。これはもとより「政治」とは何かという問題と直接関連するのである。ところが「政治とは何か」といういわゆる「政治概念」の問題はきわめてむづかしい政治学の根本問題である。従来、とかくこの問題の考察において政治とはこれこれであると、無制約にただ一義的に規定することが普通となっていた。しかしこの概念は、そう簡単に、きめられるものでないことは科学方法論のABCをわきまえる者には明瞭な筈である。宗教や哲学という「政治」と文化科学という「政治」とが同じものでないことはもとより、文化科学における「政治」も分科のいかんにより同一ではありえない。すなわち「政治」ということばは、学問上、これを一義的に解するのではなく、多義的に解せねばならないのである。同じ政治学の分野でも、政治哲学と、政治科学と、政治政策学の部門では、それぞれ政治概念の内容と論理的構造は異ならざるをえない。いわば「政治」の形而上学的概念と、政治科学的概念と、政治政策学的概念とは同一ではありえないのである。いわんや、政治学における「政治」と、政治史学における「政治」とは

学問方法論上、同一でありえないことはいうまでもないのである。筆者は、国際政治学における政治概念を二つに別け、試みに「理念的国際政治概念」と「実証的国際政治概念」としたのである。(拙著「国際政治学概論」第一篇 国際政治学方法序論)

実証的国際政治概念は国際政治科学のテーマであり、理念的国際政治概念は国際政治政策のテーマであると考えたのである。

そもそも「政治とは何ぞや」というテーマは、第一次大戦後、わが学界で、重大な論争問題となり、甲論乙駁、ほとんど尽くるところを知らない有様であったことはなお人の記憶に新たなところである。ここで、この問題をむしろえすことはもとよりできないが、筆者のみるところを一言もていうなれば実証的な政治とは、要するに、人類社会における諸集団間の生存闘争過程の集中的表現であり、理念的な政治とは、正義、自由、平等、連帯の政治理念に基く人間の共同社会を実現しようとする試みであると解する。したがって、実証的な国際政治とは何かをいえば、それは、近代国際社会における諸民族国家または民族的政治団体の間に行われる生存闘争過程に外ならぬこととなるのである。筆者は、国際政治学概論では、これと同じ意味を、「近代国際社会における各民族国家の、自己保存または他国支配のための武力ないし権力による対立闘争の過程である」と表現したのである。

筆者の定義と大体において同じ意味の定義を考えているのは、今日アメリカの国際政治学界の第一人者と目せられるHans Morgenthauである。かれは名著 *Politics among Nations* (1948, 1953, 1960) で「国際政治とはすべての政治と同様に、権力闘争である」International politics, like all politics, is a struggle for powerと短刀直入に言明し、「国際政治の究極の目的が何であれ、権力がつねに直接の目的である」と断言している。(Politics Among

Nations, 1953. p. 13)「国内政治であれば国際政治であれ、すべて政治というものは三つの基本的パターンを示すものである。すなわち、一切の政治現象は三つの基本的型に帰することができる。政治政策というものは権力を保持するか、権力を増大するか、はた権力を示威するか、何れかを求める。」(op. cit., p. 21)とも説いているのである。そして権力を保持しようとする政策は、現状維持政策であり、権力を増大しようとする政策は帝国主義政策であり、権力を示威しようとする政策は国威政策 (Policy of Prestige) であると進んで詳説している。モーゲンソーが、政治は権力のための闘争であると定義づけることは簡明直裁で、要を得たものであるが、権力は、本来、政治の手段であつて政治そのものではなく、また政治の真の目的ではない。政治は人間集団の生存維持ないし拡大のための権力による闘争過程であるとする方が、ヨリ正確ではなからうかと思われるのである。

さて実証的な政治一般は、そういうものであるとしても、国際政治科学における政治概念と、国際政治史における政治概念とは方法論上、同一であることはできない。この両者はともに経験的文化科学に属するものであるが、国際政治科学の方は、歴史的経験的国際政治の理論ないし法則を探究する社会科学であるに對して、近代国際政治史の方は近代国際政治の時の流れにしたがう生々發展の過程を叙述する歴史科学である。前者では、近代国際政治の普遍概念を定立し、それに普遍妥当する理法を求めようとするものであるに對して、後者では近代国際政治における時間の流れにしたがう發展の系列を求め、その各過程のユニークな特徴を明らかにしようとするものである。前者は、国際政治現象のいわば靜態的考察であるに對して、後者はその動態的考察であるわけである。したがって、前者における国際政治は普遍概念そのもので、その論理的構造も、實質的内容も、その取扱う範圍内ではつねに同一である。ある

政治科学の著作の第一頁から最後の頁まで、そのことばは同一の意味をもって用いられるのである。これに反して国際政治史では、その用いるところの国際政治ということばは、發展的・動態的な形で用いられるものであるから、その論理的構造も、その実質的内容も、時の経過とともに次第に変動しゆくものである。同じく国際政治ということばをつかって、歴史の時期の経過に応じてその内容も進化してゆくのは当然である。近代初期における国際政治と、初期における国際政治と、中期における国際政治と、後期における国際政治とは、同じく国際政治といっても、その内容は、それぞれ時代の進化とともに変動してゆくのである。その時期時期における国際政治を一々、概念的に規定し解説してゆくことはできないわけである。それかといって、国際政治科学における国際政治と、国際政治史における国際政治とは本質的にちがったものかという点、それはもとより本質的には全く同一のものである。それはともに、近代における国際政治現象という同一のリアリティーから出てきたもので、本質的には一つのものであるからである。ただその相異は学問方法論から来る学的操作の上の相異にすぎないことはいうまでもないのである。

## 九 従前の外交史著作の欠点

このようにして、まず、国際政治科学で、近代国際政治の概念が定立されると、その概念をたよりとして、近代国際政治史で、取扱うべき対象の範囲をきめることができる。近代世界史で、このような諸国家間の権力闘争が演ぜられるようになったのは、十五・六世紀のころおいに行われたイタリア戦争（前期一四九四―一五一九、後期一五一九―一五五九）であるから、近代国際政治史は、イタリア戦争から起筆されるのが正当と認められるのである。従前の多くの欧米の学者が前述のように近

代外交史の叙述を、ウエストフアリア會議から始めたのは、ヒルの著書第一巻の序文にも指摘されたように、研究資料や、既存研究の有無から便宜上、採られたやり方にすぎないのであって、学問上は正当ではないことがわかるのである。またヒルが *A History of Diplomacy in the International Development of Europe* で、その起筆を古代までさかのぼらしたのは、その野心的な点で賞讃に値するけれども、そうすれば、古代国際政治史、中世国際政治史、近代国際政治史をすべて含むこととなり、一人の学問的仕事としては、あまりにも大にすぎるといわざるをえないのである。近代国際政治史だけでも、今日なお、世界におけるその学的水準はさほど高くないと思われる。古代国際政治史や中世国際政治史の分野にいたっては、まだほんの荒野であって、ほとんど開拓の緒口もつけられていない有様であるといって過言ではなからう。

## 一〇 日本の欧来に対する学問的独立宣言

以上、筆者は、五十年の過去の学的生涯で自分がたどった学問的遍歴の路筋をあらかた述べてみた。幸に、国学の完成者と仰がれる本居宣長翁と同じ郷土に生れた自分は、学問に志した当初から、日本および日本人の学問的独立という悲願を抱いて今日にいたった。国史の初めから日本と日本人は外国の文化文物にあこがれてこれを輸入し、これを模倣し、これに感化されることに慣れてきた。文化的には、日本はいつも外国のコロニーに終始したといって過言ではないと思われる。このことは今を距る七十三年前、日清戦争勃発の前年にあたる一八九三の五月十日イギリス、ケンブリッジ大学で、日本人会の会合の席上、かの有名なロバート・シーリー教授が夙に道破したところである。博

士は「日本人は他国の諸文明の実験主義者 Experimentalists である。それゆえ留学生諸君がこの地球を横断して、はるばると、ケンブリッジに研究に來たのはけだし理由のあることと思う。日本が東洋の文明を抛擲して、西洋の文明を模倣することに決した以上は、諸君がわがイギリスの文明と学問とを研究されるのは不思議ではない。いやしくも日本人がその固有の文明を一夜のうちに棄てて、新たな文明を採用することができると確信される以上は、諸君はその外国の文明を細密に研究しなければならない。日本人会の副会長たる マカリスト博士 Dr. Macalister は私が諸君に何等か参考になるべきことを講演するように希望された。けれども私は諸君にどういう参考材料を供給すべきであろうか？ 私は二千年來の伝統に捕われ來ったイギリス人には、全く不可能なこの前例のない日本の冒險的実験 Adventurous experiment について参考材料を与うべきであろうか？ どんな国民といえども、その過去を棄てて、全然新しい生活を始めることができるものであろうか？ こういう経験にはいふべからざる危険が伴うことがないであろうか？ もし自分をして、諸君の学問の参考になるべきことをいわしめるならば、私はまず歴史を尊重することの必要を強調せねばならない。また私は結局、この冒險的実験の得失を研究し、古い伝統と人種（民族）との關係、並に、いかにして、またいかなる場合に、このような伝統が全然抛棄せられ、これに代うるに、他の文明をもってすることをうるかを考察することを勧告しなければならない」と説きおこし、諄々として日本留学生に教えるところがあつたのである。博士は、右のような問題は史学の一部分であるとし、元來史学というものは、一つの文明を構成するすべての制度の起源と發達、並にこれらの制度を破壊するところの革命についても一つの理論をもっていなければならないと説き、西洋文明とくにイギリス文明の起源と發達には独得の理由のあることを指摘し「私は諸君にむかっ

て、イギリスの倫理上の理想をそのまま採用せよと勧告することには大なる躊躇を感じざるをえない」と自白し、政治は倫理や宗教と分離することはできないもので、「日本が西洋の文明を採用する以上は、ただイギリスの政体と制度とを模倣するだけでは十分でない。また倫理上および宗教上の理想をも探究しなければならぬ。」と教訓し、進んで「元来イギリス人は、矯正したい自負心をもっていると同時に、商業と金儲けより外に知らない国民であるように解せられているが、こういう評判は甚だあたっていない。わが国民の固有の性格のうちには倫理的熱誠の存するのを見る。諸君がイギリスの文学を研究されるならば、この点が明瞭になるであらう。……しかもこの熱誠は、倫理と宗教上の理想を根柢として、すべての制度の上にあらわれていることを理解されるよう切望する」と結んだのである。俾眼紙背に徹するほどの鋭い洞察力をもっているシーリー博士は右のように夙に、わが国の外国の文明を模倣する習癖の危険性と困難とをふかく認識して、わが国人に警告するところがあつたのである。またかのヒットラーが有名なマイシ・カンプフのうちで、民族の優劣を論じたうちで、第二級の民族は、第一級の創造した文明をただ模倣し、運搬するにすぎない「猿種族」であるとし、日本人をこの種の民族の筆頭においたことは人の知るところである。

わが国は古来、幸に政治的には最近の外国による征服をのぞき、つねに独立を維持し来ったにかかわらず、文化的・学問的にはいつも外国のコロニーたる境涯を免れなかつたのである。こういう状態は、はたして永久に続けてよいものであろうか？　日本人は生れながらに「猿民族」であつて、永遠に創造民族となることは不可能なのであろうか？　日本と日本人にとってこの問題は、日本人がはたして、世界的民族となりうるや否やという問題の根底によ



こたわる重大問題なのである。この問題を積極的に解決してこそ日本国と日本人は、真の意味で、自主独立の民族となることができるわけであるのだ。

これを歴史に徴するに、アメリカ国民は三たびヨーロッパにむかって「独立宣言」を発したのを見るのである。第一回は、一七七六年七月四日、十三州の連合会議が母国イギリスに対して発したフィアデルフィアの「デクラレーション・オブ・インデペンデンス」である。これは支配者イギリスに対する政治的独立の宣言であった。第二回は、一八二三年十二月二日、第五大統領ジェームス・モンローによって発せられたいわゆる Monroe Doctrine である。これはヨーロッパの諸強国に対するアメリカ全体の政治的独立の宣言である。第三回は一八三七年八月三十一日、ハーヴァード大学、ファイ・ビーター・カッパ協会でなしたラルフ・ワルド・エマーソンの The American Scholar という講演であった。これはあの有名な医学者かつ文人である Oliver Wendell Holmes が評したように、「正にアメリカのヨーロッパに対する知的・学問的独立の宣言であったのだ。詩人 James Russell Lowell は曰った「エマーソンが、海底電線を切斷して、われわれアメリカ人に深海の壮厳と危険とを知るの機会を与えてくれるまでは、われわれはなお、イギリスの思想に、知的にまた社会的につながれていた」と。

エマーソンはこの講演の初めに「われわれの隷属の日、他国の学問の長い見習いは今や終りに近づいている」と宣言した。学者とは何であるかを説いて「この人間の職能の分配のうちで学者は受任した知性人 *delegated intellect* であり、正しい状態では「思考する人間」*Man Thinking* であり、墮落した状態では、単なる思考家となり、また更にわるい場合には他の思考する人々の鸚鵡とならうとするものだ」とする。かれは学問はこの思考する人間の創造に

かかるものであることを強調し、「人間は希望し、天才は創造する」Man hopes : genius creates という。ところが「人が自分自身の見る者であるのをやめて、他人の心から真理をうけとるとすればそれは致命的な害毒だ。天才はいつも大いに過剰感化によって天才の敵となる」と喝破する。学者は自己信頼 Self-trust が生命である。自分の目で見、自分の手でとり、自分の足で立たねばならないと自己信頼を強調する。

In self-trust all the virtues are comprehended. Free should the scholar be—Free and brave. Free even to the definition of freedom, “without any hindrance that does not arise out of his own constitution.” Brave ; for fear is a thing which a scholar by his own function puts behind him と叫ぶ。かれは終りに臨み訴える「学者はその時代の一切の能力、過去の一切の貢献、将来の一切の希望を自分に摂取せねばならぬ者である。かれは知識の宝庫 an university of knowledges でなければならぬ。もし学者の耳に突入すべき何よりも大切な教訓があるとすればそれはこうである。「世界は無である、人間が一切である、汝自身のうちに一切の自然の法がある。そして汝はまだ樹液の一滴の上り方を知らないのだ、汝のうちに、理性の全体が眠っているのだ、一切を知るとは汝の任だ、一切を敢てすることは汝の任なのだ。議長並に紳士諸君、人間のこの探究されない力へのこの信念こそは、一切の動機、一切の予言、一切の準備によってアメリカの学者に属する。われわれはあまりに永くヨーロッパのみやびなミューズの神々（筆者註。ミューズ九女神、学芸・詩・音楽の女神）に傾聴しすぎた。……われわれは自分の足で歩こうと欲する、われわれは自分の手で働こうと欲する、われわれは自分自身の心を語ろうと欲する。」と叫んだのである。エマーソンのこの宣言は何という力強い偉大な雄弁であろうか。百数十年後の今日アジアのわれわれを奮い起たし

めるものがあるではないか。エマーソンのいうように、アメリカ人にはアメリカ人のジニアスがある。アメリカ人のジニアスはヨーロッパから独立してその天稟の特性を發揮しなければならぬ。そうでなければアメリカの学問は、いつまでたつてもヨーロッパから独立することはできないのだ。思うにヨーロッパ人やアメリカにかぎらずすべての民族にそれぞれジニアスがある筈だ。アジア人にも、アフリカ人にも、それぞれのジニアスがあるはずである。学問の分野でもまた然りである。アジアの民族やアフリカの諸民族がいつまでも、ヨーロッパやアメリカのジニアスに隸属し、それを模倣しているばかりでは、いつなつても、これらの民族は、ヨーロッパやアメリカから独立することはできない。これらの民族は、それぞれのジニアスを發揮して、学問的にもヨーロッパやアメリカから一日も早く独立せねばならない。これらの民族も、かつてのアメリカと同様にヨーロッパやアメリカに対して、政治的独立を宣言するにとどまらず、また学問的独立を宣言せねばならないのだ。これらの民族は自分たちのジニアスを確信し、不動の自己信頼をもたねばならないのだ。これらの民族はそれぞれ自分の足であるき、自分の手で仕事をし、自分自身の心を語らねばならないのだ。かつて、ヨーロッパの東漸に真先に挑戦し、政治的独立を宣言して一たび成功した日本人は、この学問的独立戦においても先陣を承わらねばならない。かのホイットニーがかつて歌ったように、「ヨーロッパ人は夙に、その役割を勤め果たした、アメリカ人はヨーロッパ人が果たさなかった事業を遂行すべき使命がある」と実感し、アメリカ人は今、それを果しつつある。しかしアメリカ人の世界史的使命も既に果されようとしているのではないか。世界はいつまでもアメリカ人の天下ではあるまい。日本文化の特性を夙に認識してこれを世界に紹介したあの Basil Hall Chamberlain は、一九三三年に出した随筆集 *Encore est vivre la souis*

